

松戸市立松戸高等学校校歌

二. 天離る（あまざかる）

※あまさかる→あまざかる に訂正

校歌解説

（1）紙敷の丘に磐石のいしづえを置いて建つ我等が母校，ここから眺めわたすと，下総台地のなだらかな起伏が遙かの地平までつゞき，そこに開けた田園と点在する自然林にはさわやかな風が吹きめぐる。まこと広大な景観ではないか。

わが校に集い，青春の夢をむすぶ生徒たちは，一人一人がかの鵬のひなにも例えられるような将来のある人物ばかりだ。まだ名実ともに雛ではあるが，彼等はその片鱗を見せて，共に空高く舞い上り，やがて大成する日に備えて真剣にはいたきつゞける。そうした3年間の努力は決してなまやさしくはないけれども，彼らは厳しい鍛錬によく耐え抜くだろう。そして鵬が終生の棲家にえらぶという深山の奥，理想の山嶺が青く輝くあたりを心にとめて忘れないのである。

（2）澄みわたった空に，西のかたはるかに富士の麗姿が浮かび，近くには北のかた筑波嶺の端正な山容が望まれる。いかにも優美な環境である。

このすばらしい紙敷の大地で，若き日を友と手を取り合っただけで励もうではないか。そしてまた君たちの師と共に汗を流しながらスポーツに作業にうちこみ，たくましい体力と実践力を養うがよい。

校庭も校舎も，すべて我々の道場だ。楽しく，力いっぱい高校時代を過そう。丹精して育てあげた果実の放つすばらしい香りのように，我々も自らを研きながら青年にふさわしい高潔なところを身につけよう。

（3）豊かな江戸川の水がめぐり流れて，そこに抱かれ，うるおされた松戸市は一年中美しい緑に包まれた街，我々の愛してやまぬ郷土である。

ここには，上古から開けた文化が今に伝えられ，数々のすぐれた伝統がある。松戸市立高校に学ぶ我々は，こ

れ等誇るべき幾多の遺産を受けついで更に新たな発展をつけ加えてゆかねばならない。この任務をおもい、知恵と知識の富を一層深く求め、十分に貯えようと我々は日々努力する。そして心に固く期する者の、情熱にもえた晴やかな瞳をいつも高く遥かなものに向けるのだ。輝かしい明日の郷土、明日の日本を作る力がそこに生まれてくるのである。